



3

乳

新集 凱犬 作品

対象年齢18才以上
ADULT ONLY



リサの
密会



ウ…ウム…
ウ…ウム…
は…
リガ君…
今日の下着は
とてもいい…

あ

いつもより
君の体を
いやらしく
見せる…



よ…よ…こ…こ…
いた…だ…り…て…
う…う…れ…しい…
は…
あ…!

は…あ

ビクッ

あ

ビクッ

うあ

あ!

あ!

あ

あ!

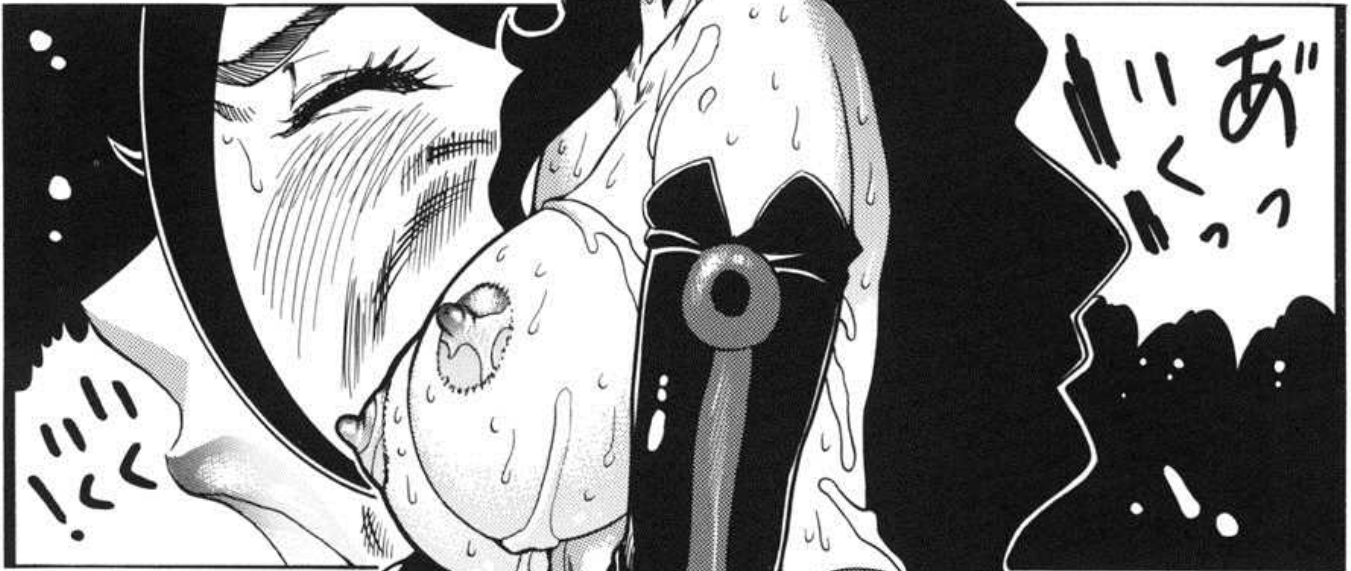
ニムッ
70
ニムッ
70
ニムッ
70





リスト
食べ物
用意する





シエスカはHな事ごと
頭がーぱい

本に
書いてない事
してください！

軍士官
のおっちゃん
ええぞ！





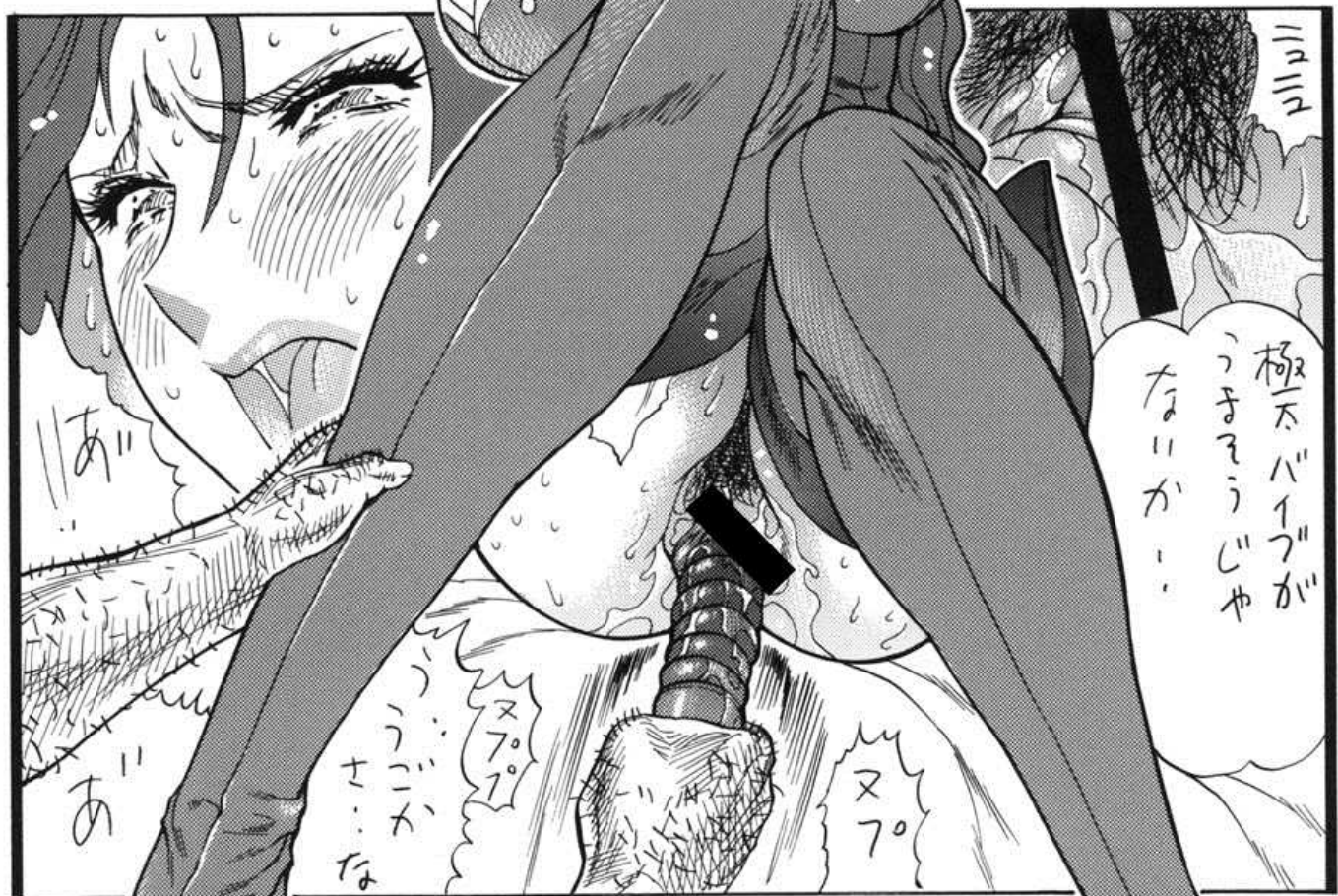
コーネリア
日本人に
つかまる



おん連が
入れると前
にほぐして
やるからな

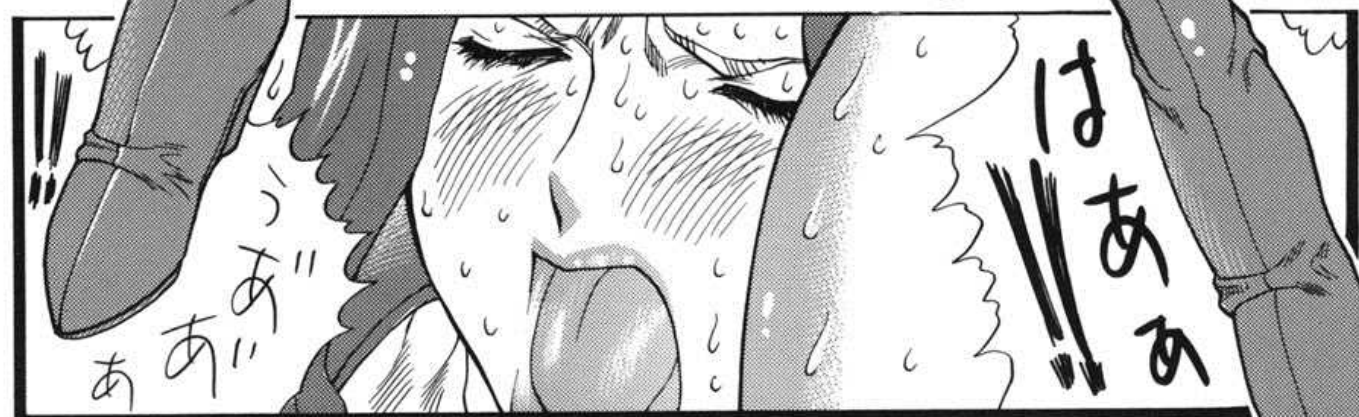


あ
あ



極大バイブが
うさそうじゃ
ないか！

うごか
な
又7°
又7°



はあ
あ







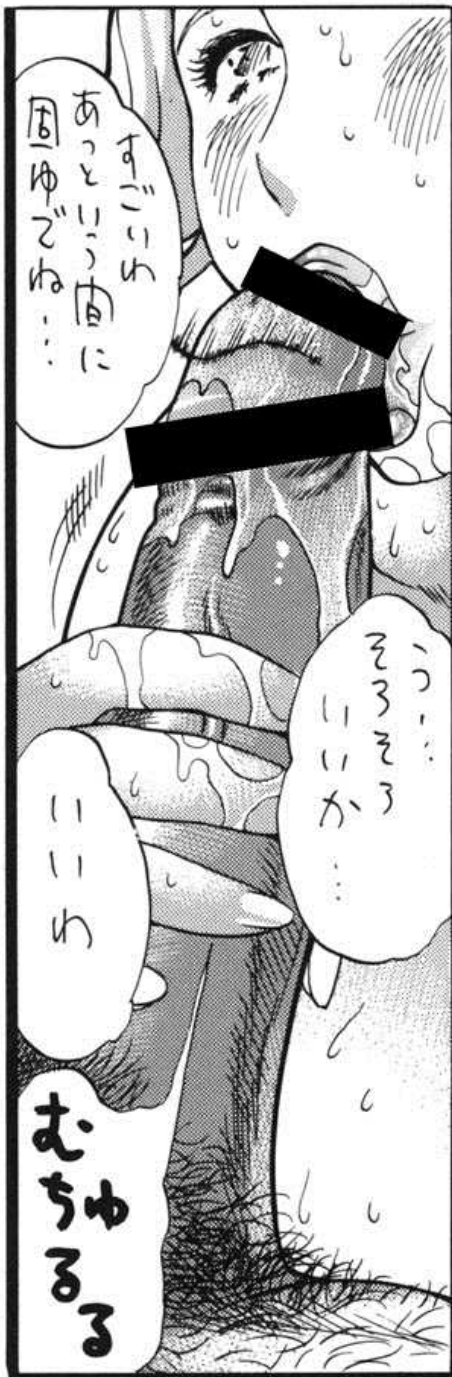
うむ：

上手だ：
そこの訓練も
うけるのか



ん：
そうよ：
ん心：

（ここの訓練も）
もっていて
いやまになら
ないでしょう？



あっといふ間に
固ゆだね：

うむ：
いいか：

いーい

むちゅるる

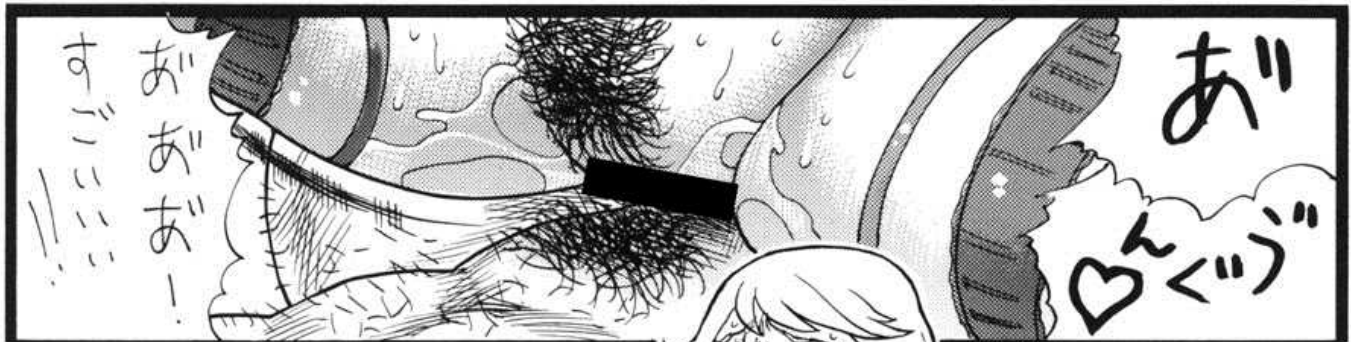


：今日私：
少し変かも
しれない：

ん♡

ん♡
ムチュツ
ググツ

みんなに
いやらしい尻持てるに
なるなんて...



あー!!
あー!!
あー!!

あー!!
♡んぐ♡



あー!!
あー!!
あー!!

あー!!
あー!!
あー!!

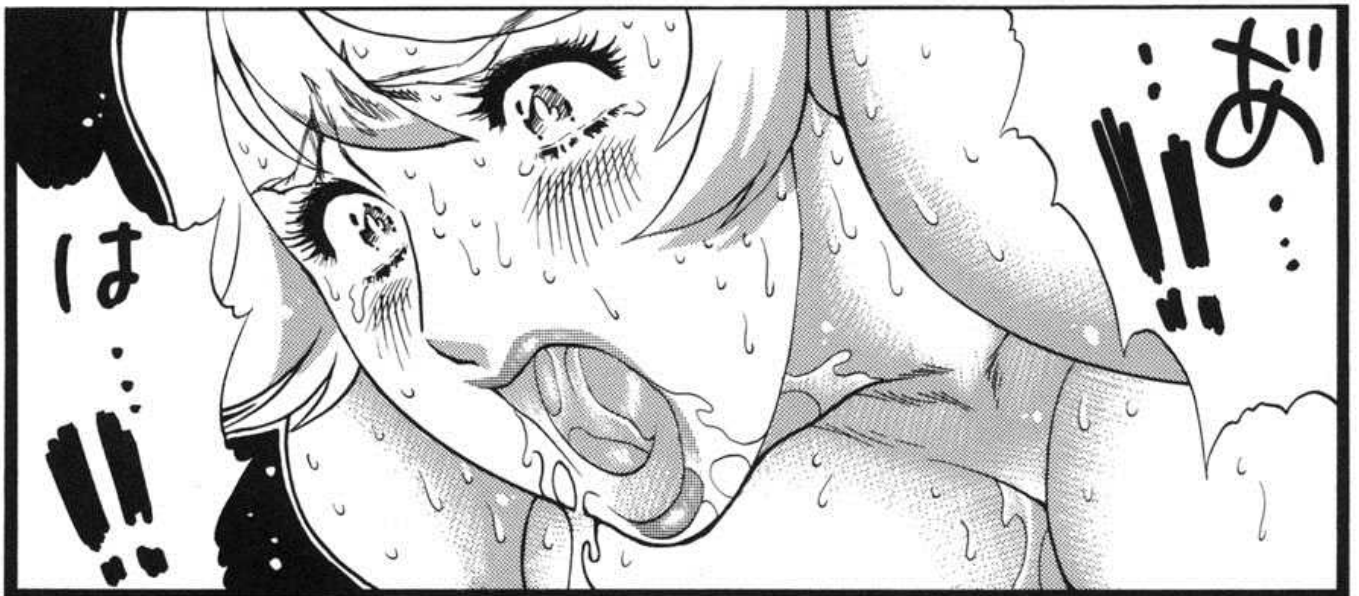
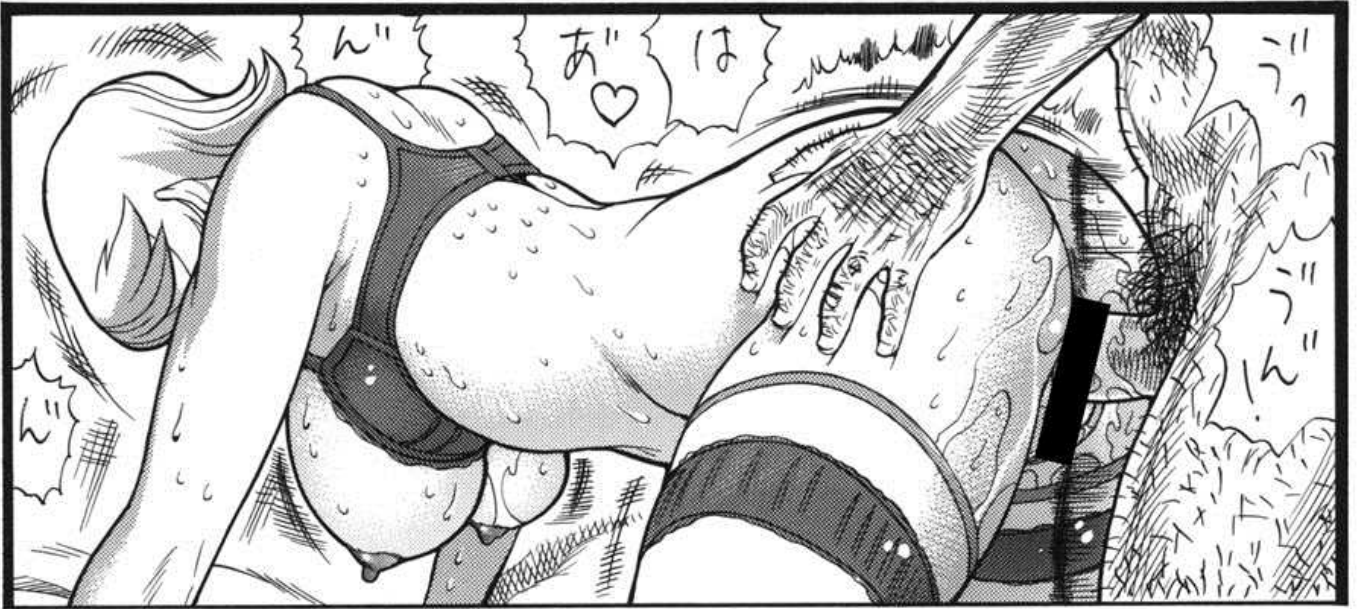
あー!!
あー!!

あー!!
あー!!



あー!!
あー!!
あー!!

あー!!
あー!!
あー!!

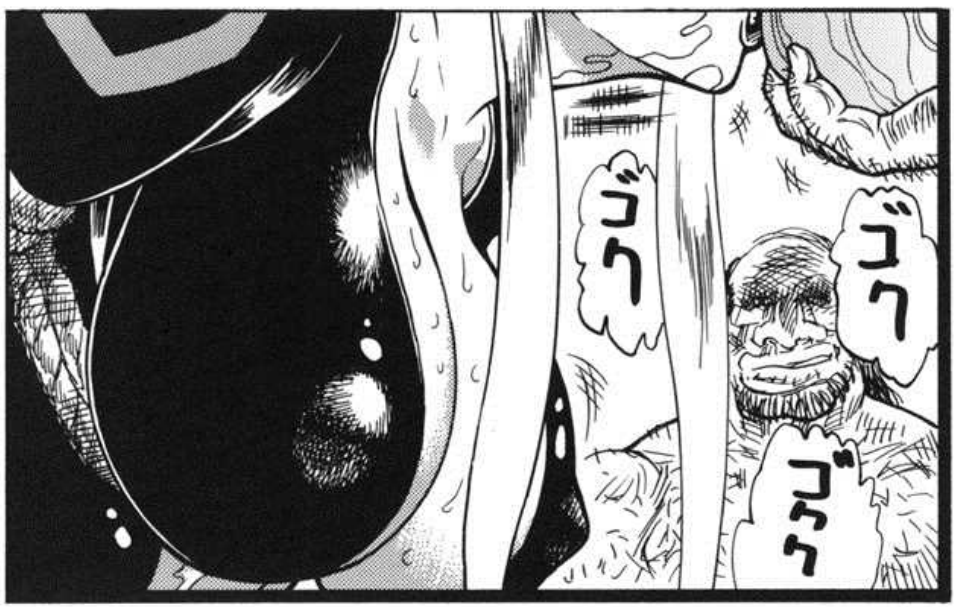








かすが
落る武者山賊
にあつかまり





あ
あ
あ

あ

か
は



ビビ

あ

た
そ
く
効
き
は
じ
め
た
よ
う
だ
た
な



あ
お
お
何
を
の
ま

ち
ぢ
ぢ
ん

お



あ
あ

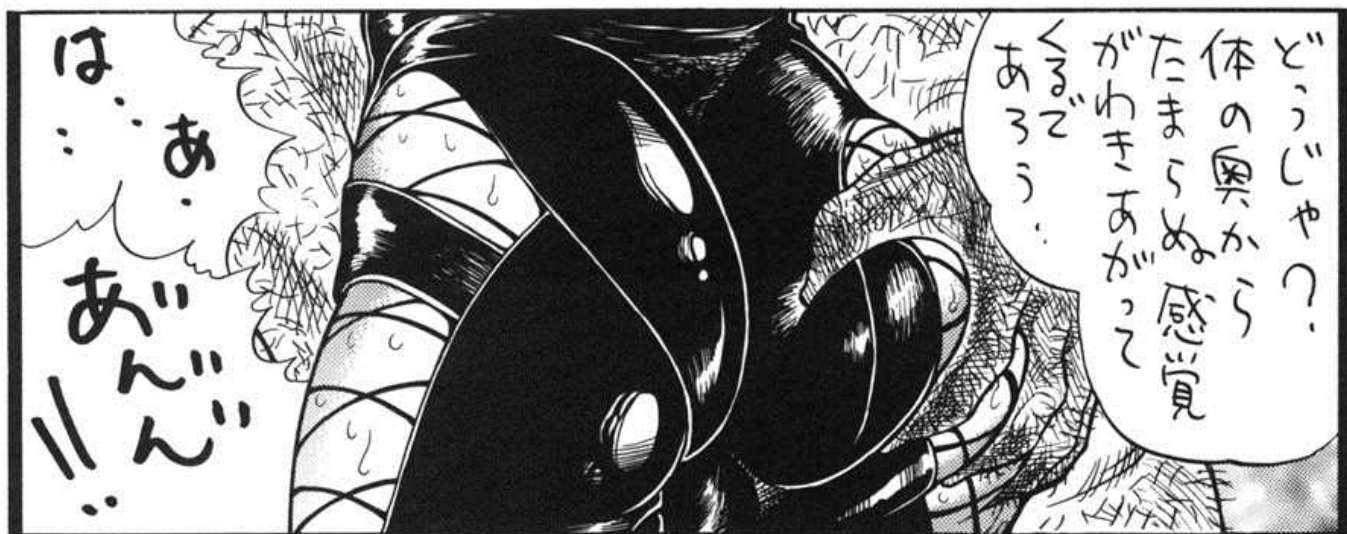
山
の
サ
楽
草
か
ら
作
っ
た
劇
媚
薬
じ
ゃ
...
ク
ク
ク
...

う
う



訓練とっんだ
お前のような
くノーでもこの
うずきには
身をゆだねる
しかあるまい...

う!
ん!
ん!

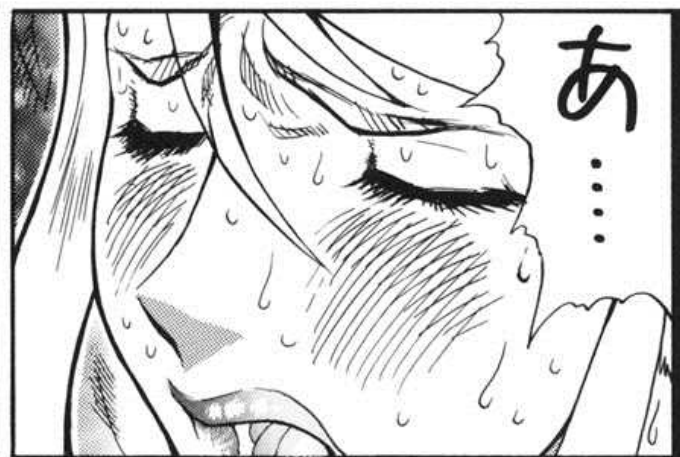


どうじゃあ?
体の奥から
たまらぬ感覚
がわきあがって
くるぞ
あろう...

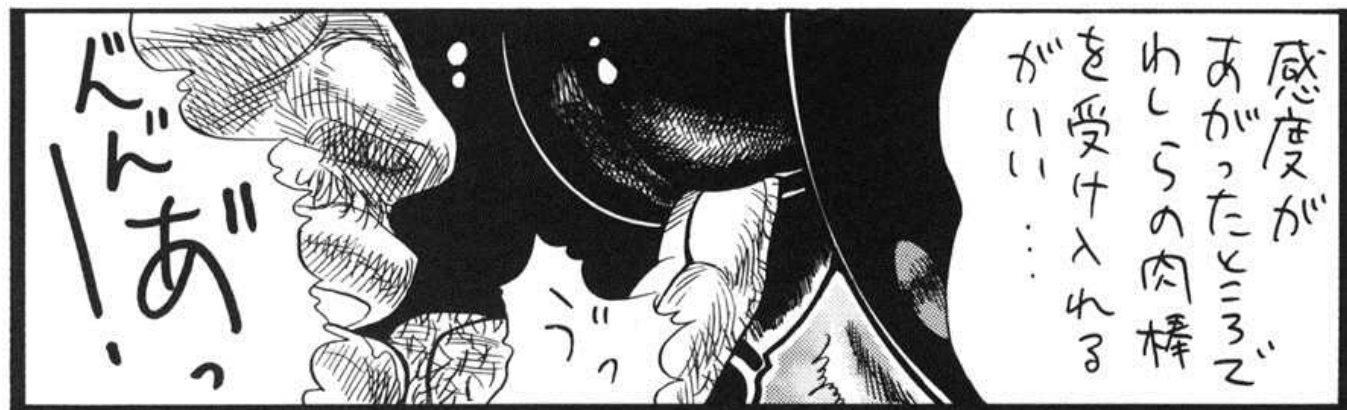
は...あ...
ん!



は...
ん!



あ...

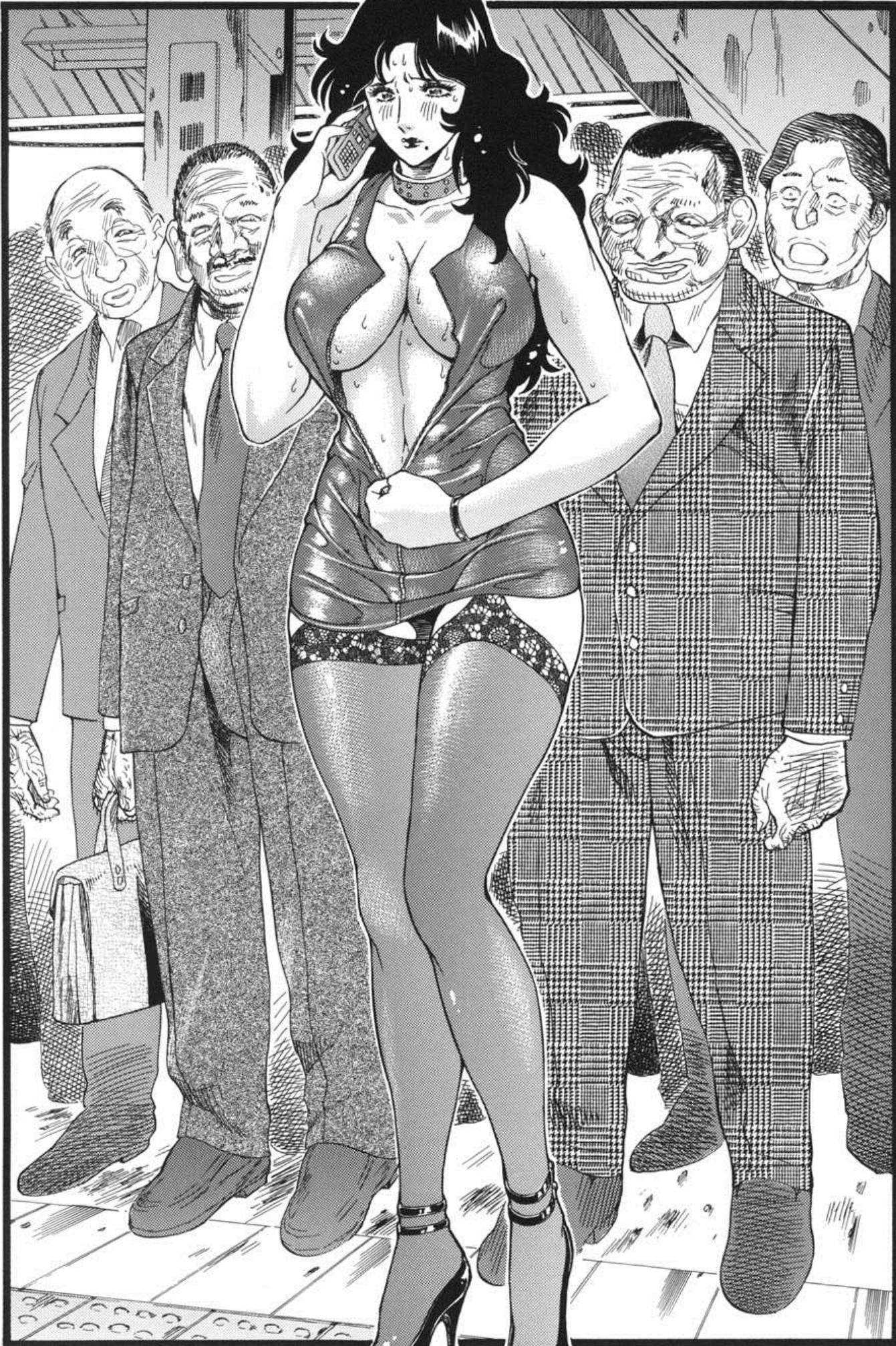


感度があ
あかったところ
ゆしらの肉棒
を受け入れる
が...い...

ん!
ん!
あ!



END



未だ朝霧の残る早朝。郊外から都心へと向かう電車の発着するホームは、いつもどおりの殺人的混雑だった。周りは、地味な色合いのスーツを身につけたサラリーマンたちが大半を占める。

そんな中、派手な光沢を放つ漆黒のボディコンワンピースをまとった美女の姿は、男たちの視線を釘付けにしていた。

12センチのピンヒールにより180センチを越えるずば抜けた長身。一分の隙もなくピッタリと肢体に張り付いたボディコンワンピースは、グラマラスで官能的なボディラインを晒け出すどころか、より過激に、より扇情的に演出する。殆ど丸出しの肩と背中、丸々とした二つの肉球がこんもりと盛り上がった胸元、薄黒のシースルーストッキングによって悩ましく色づけされた美脚、超ミニの裾とストッキングの僅かな隙間に晒されたムッチリと色っぴい太腿。

爽やかな早朝には不似合いなほど淫蕩な色香をムンムンと発散する肉体、そこから視線を上へと転じて、男たちの期待は裏切られない。そこには、豊かな黒髪と口元のホクロが印象的な美女の貌がある。典雅なまでの気品に、女盛りの“熟れ”が絶妙にブレンドされた美貌には、男をソクソクとさせずにはおかない物憂げさまで含まれていた。

男たちの視線が集中していることは、それを向けられた本人——来生泪——にも分っている。痛いぐらいに。

生来の美貌とモデル顔負けのスタイル故に、男たちから視線を向けられることには慣れてはいるが、こんなにも無遠慮で生々しい視線を向けられたのは初めてだ。気を強く張っていなければ、今にも両脚が震え出しそうになる。だからこそ、泪は必要以上に背筋を伸ばし、毅然と正面を見据えていた。

「——？」

不意に、手にしたハンドバッグが震えた。中の携帯電話が振動を発しているのだ。

携帯を取り出すと、発光するディスプレイには予感した通りの名前が表示されている。泪は一瞬だけ躊躇した後、通話ボタンを押した。

『——俺だ』

その声を聞くだけで、全身に怖気が走り、肌が粟立つ。

『よく似合ってるじゃねえか。あんまりエロ過ぎて、見てるコッチが恥ずかしくなってくるぜ。ところでな……俺がプレゼントしたモノは、“もう一個”あったよな？』

「——っ!？」

泪の臓腑が音を立てて縮み上がった。男の言う“プレゼント”は、結局身につける覚悟ができないまま、今も小さなハンドバックに収まっている。

「それ、は……い、今から、これから、着けようと思って……」

必死に絞り出した声は、自分でも驚くほどしわがれ、掠れていた。その内心では、恐怖と焦燥感が恐ろしいほどの勢いで奔騰している。

『俺は、“家から着けて来い”って言ったんだぜ。一晩寝て、そんなことも忘れちゃったのか？ああ……お前にとっては、“愛ちゃん”のことなんてその程度のことなんだな？』

「ち、違いますっ!!」

最愛の妹の名を持ち出され、思わず泪は我を忘れて叫んでいた。だが次の瞬間、周囲からの視線が数倍にも膨れ上がり、頬を朱に染めて俯いてしまう。

『舐められたもんだ。俺には、この満員のホームで愛ちゃんの“恥ずかしい写真”をバラまく度胸がないと思ってるみたいだな。』

「っ!？ま、待って!!すぐに、すぐに着けますから、それだけはっ!!」

男の言葉に込められた危険さに、周囲から殺到している視線すら束の間存在感を失う。泪は、電話を耳にしたまま必死の哀願を繰り返していた。

『よおし、そこまで言うなら、今回だけは勘弁してやる。さっさと着けろ』

「あ、ありがとう……ごさい、ます」

もはや僅かな躊躇も許されない。ためらう仕草を少しでも見せれば、男は間違いなくやるだろう——そういう男だ。出合ってまだ二日も経ていないのに、泪には確信があった。

震える手で、バッグから“それ”を取り出す。怪訝な表情を浮かべているサラリーマンたちを無視し、素早く“それ”を首に巻きつけた。

その瞬間、目撃していた全員が驚愕のあまり目を剥いた。中には驚嘆の呻きを漏らす者までいる。

泪が取り出し、首に巻きつけたのは——大型犬用の真っ赤な首輪だった。早朝のホームで目撃するにはあまりに異様で、異常すぎる光景。周囲から上がるざわめき、失笑、声なき揶揄。あのエロい格好した女、変態じゃねえの？そんな囁きすら聞こえてくるようだ。

泪は強く、思い切り強く両目を瞑り、奥歯を噛み締めた。それでも、剥き出しの白い両肩が小刻みに震えてしまうのを止められない。

全ては愛のため、妹のため、その想いにすがりつくことで、羞恥に狂い出しそうな自分を必死に押さえつける。だが、押さえれば押さえるほど、妹のことを思えば思うほど、泪の心は激しく軋み、ひしゃげ、壊れていく。

『やればできるじゃねえか。だが、お前が俺の命令を無視した事実は変わらねえ。“落し前”はキチンとつけてもらうぜ』

脅迫同然に更に何事かを命ずる男。

思考能力が著しく低下した泪は操られるようにコクリと頷くと、左手を胸元へと伸ばした。白魚のような指先が、胸元一杯まで引き上げられたフロントジッパーを掴み——ジリジリと引き下げ始める。

周囲のざわめきと興奮が急上昇する中、ジッパーは圧倒的な膨らみを誇るバストの中央部を経て、更に下方へと進んでいく。焦らすように、ゆっくりと。

その過程で、豊満すぎる乳肉は中央にできたボディコンの開口部に寄り集まり、深い谷間と肉球が徐々に露になる。

そしてジッパーが臍あたりで停止した時、緊張ですっかり固くなった肉蕾こそ辛うじて隠されていたが、その豊かなバストの大半が早朝の冷たい空気に晒されていた——。



通勤快速車内。立錐の余地もない人混みの中で身動きが取れない涙に、痴漢の魔手が迫る。露出狂と言われても否定できない自身の格好に対する引け目と、ホームで晒した破廉恥行為に対する自責の念から、抵抗することができない泣。それをいいことに加速していく痴漢の暴虐。超ミニのスカートを捲られ、晒されるノーパンのナマ尻。無防備な秘部に、背後から捻じ込まれる野太い指。最初は恐怖とおぞましさが感じなかった。だが、この異常な状況下で、官能的に熟れ満ちた女体は予想もしない反応を示し始める。誇り高き女盗賊団のリーダー、そして慈愛と責任感に満ちた三姉妹の長姉の『仮面』が剥がれ落ち、長らく封印していた“女”としての本性が目覚めようとしていた……。

「うっ……んんっ……！」

観念しきったような垂れ、歯を食い縛って痴漢の為すに任せていた泣。だが、不意に蹂躪される股間の感触が変化していることに気付いた。ゴリゴリと削られるようだった掌との接触面、その“滑り”が明らかによくなっている。

(ま、まさか……)

他人と比べたことなどない彼女に、自分が濡れやすい体質かなど知る由もないが、事実は変わらない。泣は——“濡れて”いた。加えて、彼女の肉体が示した反応はそれだけではなかった。俯いた視線の先にある、これ見よがしに晒した雪白の谷間。その両サイド、極薄のエナメル生地の表面にいやらしく浮かび上がる肉芽の陰影が、明らかに大きくなっている。

(立ってる……乳首が……)

気付いた瞬間、泣は頬のみならず、肉体の奥底がカッと熱くなるのを感じた。妹がレイプされたという衝撃、そのレイプをネタに強請られているという恐怖、そして、妹を救わなければならない筈の自分までもが魔淫に呑み込まれつつある現実。

自責という名の檻に囚われた彼女は、全ての事象、全ての原因が、自らの淫性によるものであると信じて疑わない。絶望による混乱は瞬間にレベルアップし、渾身の力で閉じ合せていた両脚から、急速に力が失われていく。

自由を得た指先は、もう回り道しなかった。柔らかく蕩けた媚唇を丹念に割り開くと、いきなり中指を膣孔に突き立てた。

「ウグッ……！」

低く呻いた泣の美貌が思わず天を向く。どれほど濃く、どれほど下品なメイクでも決して奪い去ることはできないと思われた神々しいまでの美しさが剥がれ落ち、その下から現れたのは、情欲に焦がれる女の貌。

既にタップリと濡れ潤い、蜜壺そのものと化していた彼女のヴァギナは、誰の物とも知れない男の指を簡単に根元まで啜り込んでいた。野太い指に強く絡み付いた肉襞は歓喜に震えるように蠢動し、秘奥全体の発する熱感をより大きく、より狂おしく奔騰させる。

(こんな……電車の中で……わたし……)

自分自身に恐怖する泣。だが、恐怖に思えば思うほど、倒錯した情欲に狂う軀は更に熱く燃え上がり、秘奥は潤みと熱気を増す。「あ……うっ……ん、んんっ……」

小鼻が悩ましく膨らみ、吐き出される呼吸に混じる媚声はもう隠しようがなかった。既に周囲のサラリーマンたちも、彼女の異常に気付いているのかもしれない。

せめて見ないふりを、気付かないふりをしていて欲しかった。だが、そんな想いも空しく、周囲の全員が自身の痴態の一挙手一投足を注視している心地がする。

それは、不安と恐怖、自責の念が見せる幻影。

被害妄想にも似た自縄自縛の羞恥は、いっそ狂ってしまいたいと思わせるまで彼女の精神を追い詰めていく。脆弱化し、進退窮まった心は、自らの均衡を保つために、更に危険な幻想を映し始めた。それも、彼女自身の願望、という形で。

——理性も感情も全て捨て去り、体内で狂奔する衝動に身を任せられたら——。

既に、狂ったように疼く秘奥は止め処なく甘蜜を溢れさせ、指が蠢く度に淫らな湿音さえ奏でていた。滴り落ちる愛液は、太腿からストッキングを伝ってピンヒールの中にまで流れ込み、薄皮越しのノックを受け続けた淫核は、今や更なる責め鬨りを求めるように薄皮を脱ぎ捨て、固く大きくそそり立っている。

内なる願望が現実と手を取り合ってお互いを補強し、泣に屈服を迫る。

もう——逃れられない。

自分は、興味本位の観客たちが注視する中、電車の中で絶頂を晒してしまうのだ。少しくらい大きな声を出してもいいのかもしれない。どうせ周囲の人々も、自分をそんな淫らな女だと思っているのだから……。

泣の反応が変わった。

喘ぎ続けるノーブルな美貌からみるみる苦悩の色が消え去り、肉悦がそれに取って代わる。理性と恥じらいという堰を失った軀の内側には歓喜が溢れ、魔淫の衝動が命ずるまま食欲に快楽を求め始めた。

辛うじて閉じ合されていた美脚がジリジリと開き、自ら股間を男の手に強く押し付ける。より激しい淫弄を、もっと大きな快感を、そうせがむように丸出しの尻が淫らにうねる。

応えるように、痴漢の指もラストスパートに入った。愛液を飛び散らすような勢いで激しく中指を出し入れしながら、人差し指で剥き出しのクリトリスを強く鬨る。

瞳の奥で火花が散るような凄まじい快感。

アブノーマルなコスチュームで彩られた凄艶な女体が感電したように震え、ガクガクと身悶える。快楽のボルテージはあっという間にレッドゾーンを越え、あと数秒で爆発的な絶頂へ至るのは確実だった。

(い——イク……っ！！)

既に泣は絶頂を迎えることを受け入れていた。むしろ、全身を渴望感が満たしている。

それ故に、絶頂直前の絶妙なタイミングで手指が引かれた瞬間、信じられないという想いと表情で背後を振り返っていた——。



「いよお、朝っぱらから随分とお盛んじゃねえか」

「——っ！？ご、剛田……」

それが、男の名。

担任教師という立場にありながら、最愛の妹をレイプし、それをネタに強請までかけてきた男の名。長らく眠っていた泪の“女”を覚醒させた男の名。

ピンヒールを履いた泪よりも頭一つ大きい巨体の上に乗った男の顔には、邪悪や凶悪と形容するほかない愉悦が浮かんでいた。

「どうした？最後までイカせてもらえなかったのが、そんなに不満だったか？」

ニヤニヤと嗤いながら、泪の目前に甘蜜まみれの中指を突きつける。これ以上ない現実を突きつけられた彼女は、言葉一つ返すことができない。

泪は、最も見られたくない人物に、最も見られたくない痴態を見せてしまったのだ。相手が剛田だと知らなかったことなど、何の慰めにもならない。そのショックが大きすぎ、泪は完全に自分を見失っていた。

「へっ、まだ寝ぼけてんのか？なら、目でも醒ましてもらおうか」

背後から伸ばされた剛田の手が、ボディコンのフロントジッパーを力任せに引き下した。勢いのあまり下端のホックまで外れ、ワンピースだったそれは単なる布切れと化す。

「——えっ！？」

泪にとってそれは青天の霹靂だった。身体中を締め付けるようだった圧迫感が不意に消えたことに気付いて視線を下すと、そこには信じられない光景が広がっていた。

ブルンツと音を立てるような勢いでまろび出るFカップの巨乳、その下では縦長の臍も、薄い恥毛すらも、すっかり剥き出しになっている。つまり、軀の正面は丸裸ということだ。

「ひっ！！」

麻痺していた理性と羞恥心が一瞬で蘇り、短い悲鳴を上げながら両腕で身体を隠そうとする。だが、その両腕は目的を達することなく背後から捻り上げられ、ボディコンが力づくで剥ぎ取られた。手にしていたハンドバックまで奪い取られる。

信じられなかった。

泪は、ピンヒールとガーターストッキング、そして犬用の首輪以外一糸まとわぬ姿で電車に乗っていた。周囲にいるのは、スーツ姿のサラリーマンばかり。そんなありふれた日常の中に、乳も股間も尻も丸出しにした姿で、彼女は立ち尽くしているのだ。

あまりの事態の異常さに、正気を取り戻したばかりの意識がスーッと遠くなる。だが、悪夢のような現実には、彼女に失神することすら許さない。

天井のスピーカーからメロディーとアナウンスが流れ、電車が減速を開始した。

それに気付いた泪の中で、絶望と焦燥が奔騰し、混乱は錯乱寸前にまで至る。どうしたらいいのか、何をしたらいいのか、全く見当がつかない。背後に立ったままの剛田の存在すら、その脳裏からは消え去っている。

何一つ答えを見つけれないまま、電車が駅に到着した。開くドア、一斉に動き出す人々。

だが、泪は動かない。いや、動けない。そんな彼女に背後から浴びせられる声。

「俺に抱いて欲しかったら、遠慮なく追っかけてこいよ。素っ裸のまま、ホームを走れるんだったらな」

剥ぎ取ったボディコンとバッグを手に、剛田が嗤っていた。この世に存在する全ての邪悪を具現化したような醜い嗤い。その嗤いが徐々に遠くなっていく。

「ま、待ってっ！！」

事情を知る剛田がいなくなれば、本物の露出狂か変質者にされてしまう。思わず泪は叫び、電車を降りて剛田を追おうとした。だが、ピンヒールを鳴らして駆け出しかけた美脚は直前で急停止した。偶然、一人のサラリーマンとばったり向かい合ってしまったのだ。

サラリーマンは、いきなり叫び声を上げた泪の顔を見た後、何気なく視線を下方へと向け——そして絶句した。

彼はまともに目撃してしまったのだ。通勤電車という日常空間に存在する、全裸の女の姿を。類稀な美貌も、外人モデル顔負けの完璧なスタイルも、この際全く関係なかった。彼の意識に焼きついているのは、早朝の通勤電車に乗っている、白い肌も眩しい裸の女という異常極まりない光景だけ。

そして、ショックに打ちのめされているのは泪も同じだった。全身の毛が逆立つほどの衝撃。思考停止に陥り、大事な部分を隠すことすら忘れていた。

すし詰め状態から乗客が減少したことで、ようやく周囲の人々も事態に気が始めた。

ガーターストッキングとピンヒール、そして真っ赤な首輪を卑猥なアクセサリーに、丸裸で立ち尽くす一人の女。熟れ満ちるという表現こそ相応しい豊か過ぎるバストも、タプブリと肉を詰め込んでムッチリと張り詰めるヒップも、それらと対照的にキュンとくびれたウェストも、絹糸のような恥毛も、全てが眩い朝日に照らし出されて光り輝き、この世のものとは思えない圧倒的な風情をたたえている。

その光景は、場所や状況が異なれば、美神と評する他ない。だが、ここは天上の楽園ではなかった。サラリーマンたちが家畜のように詰め込まれる朝の通勤電車。楽園より遥に地獄に近い場所、神聖なる女神が、悪魔によって墮神へと貶められる場所。

ざわめきと驚愕が波紋のように伝播していく。乗客たちがジリジリと距離を置き始め、自然と円形の空間が出来上がる。その中心には、天に帰る羽衣を剥ぎ取られ、淫欲に墮落した女神がいた。“泪”という名の女神が。

「あ……うあ……」

こぼれ落ちる嗚咽、震える軀。喉は干上がったように渴いているのに、軀は火がついたように熱い。目にしている光景は白く霞んで現実感を失い、全身を冷汗が流れ落ちる。

ある意味、それは究極の辱めだった。四方八方から集中砲火のよう突き刺さってくる数十、数百の視線。それなのに、誰も助けてくれない。声すらかけてもらえない。一方的に奇異と好奇の視線を浴びせられるだけ。

「あ、あ……ああ……あ……あ……」

か細い嗚咽は徐々に途切れ、小さくなっていく。

そして、それが完全に途絶えた瞬間、泪は踵を返して駆け出していた——。



逃げ出した涙。全裸のまま電車の中を前へ前へと駆け続ける。周囲から浴びせられる奇異の視線と驚嘆の叫び、無慈悲な携帯カメラのシャッター音。それら一つ一つが涙の心をズバズバに引き裂き、粉微塵に打ち砕いていく。

そして電車が終着駅に到着した時、涙は精根尽き果てたように座り込み、抜け殻のように心を閉ざしていた。

無人と化した車内で、不意に彼女の肩にかけられたジャケット。その温もりが、凍りついた涙の心に偽りの情愛を植えつける。膨大な感情の果てに、残された唯一の感情、“空虚”。

それを埋めるために、涙は温もりをくれた人物にすがりつく。たとえそれが、この煉獄に彼女を突き落とした張本人であったとしても……

涙の中で、溜め込みに溜め込み続けた感情が遂に爆発した。決壊したように噴き上がる激情。それによって発せられた衝動と渴望は止められない。

自らの唇を、ぶつけるように剛田の唇に押し付ける。嘔吐感すら覚える筈のヤニ臭さもアルコール臭もまったく気にならない。唇で唇を押し開き、渴望に震える舌を剛田のそれに絡み付かせる。剛田が応じると、腰が砕けてしまいそうな甘美感が込み上げてきた。

執念すら感じさせるほど情熱的で、貪るような激しい接吻。

「……おねがいっ！……おねがいっ！！」

ようやく唇を離し、剛田の胸板に頬を預けた涙が繰り返す叫ぶ。荒れ狂う激情が強すぎ、次の言葉がすぐには出てこない。もどかしさと切なさで衝き動かされるまま涙は吼えた

「おねがいっ、抱いてっ！！わたしを……抱いてっ！！！！！！」

生々すぎる感情をそのまま言葉にした瞬間、秘奥の底で、新たな蜜汁がジュワツと溢れてくるのを感じた。

もう一瞬たりとて、我慢できない。今すぐに、力強い両腕でガッチリと抱きしめて欲しかった。押し倒され、両脚を開かれ、肉欲に焦がれた媚裂を思い切り貫いて欲しかった。

男の胸に埋めていた美貌が持ち上がり、正面から剛田を見据える。ゾクツとするほど濃厚な色香と憂いに満ちたその貌は、愛欲に濡れた女特有の凄みすら漂わせていた。

剛田の顔に浮かんだ色で、涙は確信した——抱かれる、抱いてもらえる。歓喜と期待で、ココロとカラダが激しく震える。

剛田は、今度こそ涙の願望を裏切らなかった。肩が掴まれ、背にしたドアに強く軀を押し付けられた。ピンヒールとストッキングで卑猥に飾られた美脚が乱暴に押し開かれる。

「あああ……」

その荒々しさすら、今の涙には堪らない。刹那、野太い肉の凶器が涙の媚肉を抉った。限界の限界まで濡れそぼった秘奥は、30センチ級の巨根すら簡単に受け止める。

それだけで、涙は肢体をエビのように仰け反らせ、声もなく絶頂に達した。気が遠くなるほどのオルガズム、ガクガクと無体な痙攣を繰り返す。

だが、まだ満足できない。満足できるはずがない。剛田の肉体と閉じたドアの間でサンドイッチにされたまま、涙が片脚を高々と振り上げた。膝が、脇腹に密着するほど高く。

もっと深い結合を、と言葉ではなく行動で求めた涙に、剛田も間髪入れずに応える。片脚を上げられたことで自由度の増した逞腰を、秘所を砕かんばかりの勢いで突き上げた。

「アオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

無人の電車内に響き渡る牝獣の咆哮。子宮口を思い切り痛打され、両腕が、振り上がっていた美脚が、反射的に剛田に絡み付く。

もはや二人に言葉は不要だった。激しくぶつかり合う腰と腰、赤鮮色の肉襖を晒して喘ぐ媚唇、青筋を立てて力強く律動する怒張、飛び散る汗と愛液、感涙。求めれば返してくれる、返せばまた与えてくれる。身も心も、いや、神経線維の一本一本に至るまで繋がっていると実感できた。それは、涙が初めて経験するSEXの凄まじさ。これまでの人生における性経験など、所詮は児童でしかなかったことを、心の底から思い知らされる。

「アッ！アッ！……アンンッ！ンウウウっ！！！！」

腰を振っているのは剛田だけではなかった。剛田に強く抱きついた涙も、自ら激しく腰を揺すり、グライドさせている。ラテンダンスを思わせる扇情的でリズムカルな動きは、無意識に絶頂を求める彼女の本能に他ならない。

身も世もない嬌声を垂れ流す半開きの紅い唇からは幾筋もの涎が流れ落ち、串刺しにされたもう一つの唇からも、溢れ出した愛液が幾筋もの流れとなって内腿を汚していた。

「アアッ！！す、吸ってっ！！胸をっ！むねッ、あっ！？アンンンンッ！！！！！！」

衝動のまま叫ぶと、剥き出しの乳房に剛田が喰らいついてきた。甘噛みなどではない。ガブリと歯を立てて先端部を口一杯に頬張り、張りのある乳肉を容赦なく咀嚼する。

「んぐッ！！おっ、おっおっ！！し、死ぬっ！！！！」

強烈かつ獰猛な魔淫が背筋を駆け上がって脳を焼く。跳ね上がり、ガクガクと痙攣する軀。痛いのか気持ちいいのかも分らない。初めて味わう激痛と快樂のツーブラトン。

恥じらいも遠慮もない、互いの欲求と衝動をひたすらぶつけ合う、まるでケモノ同士のSEXだ、と痺れた頭で涙は思った。だが同時に、今はそれでいいとも思う。飼い馴らされた犬が、初めて鎖から解き放たれた時のような開放感が彼女を満たしていた。

自分は今、“母親代わり”としてでも“姉”としてでもなく、一人の“女”として男に抱かれている——そう思うと、至福感すら覚えた。同時に、もっと“女”として必要とされたい、もっと“女”として満足させたいという想いが込み上げてくる。その想いは、刻一刻と肥大化しながら彼女の血肉に充満し、沸騰し、奔騰する。

——長年、彼女の“女”を封印してきた“姉”という殻が、砕けた。

純白の柔肌を薄ピンク色に染めて、汗みずくの裸体が淫靡に舞う。豊満極まりない乳が激しく揺れ、悩ましいエクボを両側に浮かべた美尻が弾み、淫欲の坩堝と化した秘所がギョーンと締まる。ピンヒールが踏みしめる脚元には、愛液が時に滴のように、時に驟雨のように降り撒かれ、濃厚な牝の匂いを充満させる。男の魂を蕩かすような甘い喘ぎは、時にすすり泣きになり、時にケダモノそのものの咆哮と化す。

まさに至福、歓喜の刻。既に彼女の頭の中から、無人とはいえ“ここが電車の中である”という事実は完全に失われていた——。



狂喜にも似た偽りの歓喜は、呆気なく潰えた。

剛田の背後から注がれていた視線——突然と立ち尽くす運転士の視線に存在に気付いた瞬間、偽りから醒めた魂は断末魔の悲鳴を上げる。燃え上がる自責と混乱の業火。それは泪の中で止め処なく延焼し、果てしなく拡大していく。

準備は整った。神聖不可侵たる天上の美神を悪魔の生贄とするための淫宴が始まる——、

「ほおーれ、駅弁スタイルの一丁上がり」

嘲笑うような剛田の声。下半身をM字開脚姿勢で担ぎ上げられ、後に倒れそうになった泪は、反射的に剛田の太い首に両腕を回していた。まさに、“駅弁”体位だ。

悔しさを噛み締める暇も無く、ポーズ故に全開となった秘唇に叩き込まれる怒張。

「グウウウウウウウウッ！！！！！！！！！！」

ゴリッとして子宮口を抉りこまれるような、痛みとも快感ともつかない激感に、泪は顎を突き出し、背中を弓のように反らせて悶絶する。

「覚悟しな、泪ネーチャンよ。自分がどれほどエロい女か、タップリ思い知らせてやるぜ」

無慈悲に宣言すると、剛田は遂に本格的な高速ピストンに突入した。単純に早いだけではない。腰の上下運動に加えて、抱え上げた両腕の力すら総動員した渾身のピストン。一突き一突きが、まるでヘヴィー級ボクサーのアップercutのように深く、重い。内臓まで突き抜けるような勢いで子宮が減多打ちにされ、充血した膈嚢が大きくエラ張った亀頭に擦り上げられる。その凄まじいばかりの感覚は、生娘ならともかく、男の味を知る熟れた女体に耐えられるものではなかった。

「ひいっ！！……あひいっ！！……あ……オアアアア！！！！」

落城の刻を迎えた堅城の悲哀そのままに、炎上し、崩壊していく女体。血を吐くような声で絶叫しながら、時には声すら出せないまま、抱え上げられた裸体をガクガクと痙攣させて生々しいオルガズムを晒す。

そんな凄惨な姿を、痴呆じみた表情で見つめているのは運転士。剛田の後頭部越しに見える女の貌は、これまで見たどんな女優よりも、これまで通ったどのクラブのホステスよりも美しく、高貴なまでの気品に満ちている。だがそれ故に、豊かな黒髪を振り乱し、涎すら垂らして悶絶するその痴態は、あまりにも淫靡で、魔性じみた妖艶さを発散していた。

「イグッ！！イッ、グウウウウッ！！！！！！！！あ……はああ、んっ、んああああああ！！！！も、もうっ！！……

い、いやああああ！！！！！！！！」剛田の一突きごとに、絡み合う二人の脚元に滴り落ちる淫蜜、弾ける淫水。次から次へと心身を貫いていく肉の極み、絶頂、アクメ、オルガズム。

激しすぎる絶頂の連続に、豊乳が、尻肉が、太腿が、全身の熟肉が、狂ったように身悶える。あまりに短周期の、あまりに強烈な肉衝動に、心と軀から悲鳴が止まらない。

「呆れるくらいイキっぷりだぜ。ま、無理ねえか。“愛”も似たようなもんだっしな」

「——えっ！？」

呼吸すら満足に維持できない絶頂感の連なりに、殆ど恐慌状態の泪であったが、妹の名前だけははっきりと耳に届いた

「ああ。最初に教室で犯った時は痛い痛いわってピーピー泣きじゃくってたくせに、夜中の公園に連れ出して犯ってみりゃ、途端にアヘアヘ言い出した。へっへっへ、血は争えねえよなあ？泪ねーちゃんよ。お前ら姉妹には、露出狂の変態マゾの血が流れてるみたいだぜ」

最愛の肉親がレイプされた真相、そのあまりにムゴく、あけすけな描写に、泪が唾然とする。だが次の瞬間、これまでとは打って変わった口調で反駁した。

「こ、この……ヒトでなしっ！！……あ！？アグウウウッ！！」

泪が叫び終わるのを待ち構えていたように、一際深く膈道を抉り抜く剛槍。珠の汗が流れ落ちる背筋が弓のようにギョーンとしなり、剥き出しのFカップがブルンと大きく弾む。

反射的に、首に回した腕に力がこもり、胸を合わせる剛田への密着も強まる。皮肉なことにその様は、淫情に感極まった女が自分の全てを男に投げ出した姿そのものだ。

「ああ、俺はヒトでなしの鬼畜生さ。だがな、そんな相手にアヘアヘ言ってるお前は何だ？」

「ンッ、くう……そ、それ、は……」

答えられなかった。答えようとする度に、剛田は泪の秘奥を貫いた男根の深度を強めてくる。しかし、たとえそれが無かったとしても、今の泪には答えられないかもしれない。

もはや自分に——“姉である”と答える資格があるのか。そんな自虐的な想いが泪の心身を萎縮させ、声を、心を、一層弱々しいものにしてしまう。

「へっ、言ってみろよ。ひーひーヨガリながら、自分でケツ振ってるお前は何様なんだ？ええ？言ってみろよ、来生泪！！おらっ！！言えっ！！言えよっ！！おらっ！！」

既に回復不能なまでに傷ついている心の奥底を、更にメッタ刺しにする罵声の数々。そして、秘奥を激しくプチ抜き、肉嚢を擦り上げてくる男根。ココロとカラダ、二方向からの責めは、まるで巨大な万力のように来生泪という女の根幹を締め上げていく。

「あふうっ！！うっ！！あ、あひっっ！！グウウウウ！！！！！！」

言い返そうとすれば否定され、拒もうとすれば一層の力と深度で肉奥を抉られる。肉体的にも精神的にも出口を封じられた泪の中で、荒れ狂う感情と感覚は膨れ上がる一方だ。そして遂に——来生泪という“女”の限界を越える。

(ダメ……敵わない……この男には……絶対に敵わない……)

それは敗北宣言に他ならない。墮ちた美神は——全ての苦悩をかなぐり捨て、魔淫を司る悪魔に高貴なる精神と肉体を委ねることを選択した。

自ら迎え腰になり、狂ったようにヨガリ始める泪。熟尻を激しくグライドさせ、巨根を膈奥まで導こうと肉嚢を引き締める。豊かな黒髪を振り乱し、蕩けた表情のままに涎を垂らしてヨガリ狂う。唾然と眺めている運転士の視線すら、もはや全く気にならない。

(……せめて……瞳……あなたは、あなただけは……)

それは、“一人の女”ではなく“一匹の牝”と化した彼女の、最後の願い。その心中で、最後の断片すら消え失せようとしている“姉”の、最後の願い。

だが、“姉”は知らない。邪悪に満ちた魔王の触手はこの時、悲痛な願いを向けたもう一人の妹にまで伸ばされようとしていたことを……。

CONTENTS

リザの密会	3
ラスト食べ物用意する	13
シエスカはHな事で頭がいーぱっい	18
コーネリア日本人につかまる	23
ハードボイルド (009ノ1)	33
かすが落ち武者山賊におつかまり	43
臃ふつーの人々につかまる	51
コラボ企画『Cat in the Train』 (シナリオMJ)	56

ゴリ漫3

2009年8月16日初版発行

著者 犬凱 新

発行人 水無月あきら

発行 立派堂

印刷 POWER SEEDS

<http://www007.upp.so-net.ne.jp/okachimentaiiko/>

禁無断転載 18歳未満閲覧禁止

GM 3



Рицпадон